

平成 27 年度 大学院工芸科学研究科 学位記授与式 学長告辞

本日、修士と博士の学位を取得されました皆さん、誠におめでとうございます。京都工芸繊維大学を代表し、心からお祝い申し上げます。

また、皆さんをこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様をはじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申し上げたいと思います。

京都工芸繊維大学は、昭和 63 年に大学院を改組し、工芸科学研究科を設置しました。これまでに、8530 名の修士号と 951 名の博士号の学位を授与してまいりました。

本日皆さんには、修士学位 8531 号から 8543 号まで、課程博士甲第 755 号から 776 号まで、論文博士乙第 198 号から 199 号までの学位を授与致しました。皆さんの研究業績は本学の知的財産に加えられ、提出して頂いた学位論文は広く人々に公開され、それぞれの分野における新たな展開のため、また技術革新や産業創出のために活用されます。さらに皆さんに続く後輩の研究のために利用されます。

学位を取得された皆さんには、今後、それぞれの分野においてその能力を発揮されることを希望しています。そして、特定の専門領域で研究テーマを深く極めることに主眼を置いた研究方法だけでなく、広い視野に立って、他の研究者との共同作業を心がけてください。そして自らの研究や仕事、社会的にどのような役割を持つのか、社会にどのような影響を及ぼすのか、科学者として、技術者として、一人の人間として、社会的責務を果たすことを考えてください。

皆さんは、すでに 20 年以上の勉学と研鑽を積んでこられた結果、本日の学位取得に至ったわけであります。人生の活動期の半分近くを費やして、学位を取得されたこととなります。学位取得は人生の一大イベントであり、自らの人生の方向を定める大事業であります。

博士号を取得された皆さん、本日の時点では世界のだれよりもその分野に通暁しているのは、あなた自身です。その意味では、あなたは自分の専門分野において、世界の最高峰に立ったといっても過言ではないでしょう。

したがって、自分の研究をもっともよく評価できるのも、もっとも厳しく評価できるのもあなた自身をおいてほかにはいないのです。しかしながら、日本の社会や企業において、博士号取得者の社会的評価は決して高くないのも事実です。狭い専門分野に閉じこもり、幅広い分野の研究へと展開する力がないといわれています。それに応えるためにも、最高学府において大学院を修了し学位を取得された皆さんは、自らの研究を社会に還元し、また高い見識をもって社会をリードすることが求められています。

大学における学問のあり方について東京大学の小林康夫教授は次のように述べています。

大学における知的活動が、社会に流出していくためのキーワードは「普遍性」である。学問的な成果は、個人の好みや主観によって左右されるのではなく、誰にとっても了解可能であり、説明可能な論証能力をもった普遍的なステートメントでなければならない。これはまた再検討が可能であり、納得いくまで反論と肯定を繰り返すことができる形式が必要である。すなわち、学問の成果は多数の人が議論に参加できるように開かれていることが肝要である。

大学における学問は、主観的な一人ごとを超えて、不特定多数の人に認められるような普遍性を獲得することが大切であるとされている。我々は、科学的な言説を習得することによって普遍的な言語を話す主体とならなければならない。

一方、文系の学問分野ではどうか。文化系の学問領域では数式による記述にはなじまない主題、数量化し得ない対象にこそ関心が向けられている。数量的な取り扱いを拒否し、数量化にあくまで抵抗する対象とは、何か。それはもちろん人間であり、人である。人間あるいは人間が作り出した文化事象、社会現象、歴史などは数式に還元されない多面的な対象であり、実験や再現性にもなじまない事象である。

このことから、文系の学問では、唯一つの真理ということを前提にした研究活動をすることはできない。非常に重要で理解しがたいことがらではあるが、Aにとっての真理とBにとっての真理は両立することを前提に、時代の制約の中での歴史的な事象、地理的制約、といった立体的な視点から文化的な事象を比較することが研究活動の前提とされるのである。

皆さんはすでに、普遍的な言語を身につけ、知の共同体において相互にコミュニケーションをとる資格を有しています。

しかしそれだけでは、皆さんが社会において研究成果を発揮し、大きな活躍ができるとは限りません。本日の学位記授与式に当たり、新たな人生を踏み出される皆さんには、社会におけるリーダーシップとは何かという問題を考えていただきたいと思います。

1964年5月、前の東京オリンピックの年、日本社会に関して興味深い論考が発表されました。引用しますと「上に立つ者、親分は、むしろ天才でない方がよい。彼自身頭が切れすぎたり、器用で仕事ができすぎるということは、下の者、子分にとって彼らの存在理由を減少することになり、かえって疎まれる結果となる。子分は親分に依存すると同時に、親分が子分に依存することを常に望んでいる。親分のすること、考えることはすべて子分に（彼らなりに）理解され納得される必要がある。天才的な能力よりも、人間に対する理解力、包容力を持つということが、なにより日本社会におけるリーダーの資格である。どんなに権力、能力、経済力をもった者でも子分を性格的に把握し、それによって彼らが密着し、「タテ」の関係につながらない限り、リーダーにはなりえないのである。集団の機能力はともすれば親分自身の能力によるものよりも、むしろすぐれた能力をもつ子分を人格的にひきつけ、いかにうまく集団を統合し、その全能力を発揮させるかというところにある。実際、大親分といわれる人は必ず人間的に非常な魅力をもっているものである。子分が動くのは、親分の命令自体ではなく、この人間的な直接肌を感じられるところの人間的な魅力のためである。」

この文章は、中根千枝の「日本の社会構造の発見」いわゆるタテ社会論です。

同じ年、村松貞次郎は、その著書「日本建築家山脈」において、次のように述べています。「粘土質のような社会においてこそ山脈が構成されるのであって、砂地のような人間関係では山並みは盛り上がりません。明治以降の急速な近代化を追求してきた日本社会において、この人的山脈形成の功績を無視することはできない。学問の世界における学燈というものもまた、密度の高い人間関係によって受けつがれ、発展していく。」

日本社会においては、前近代的な人間関係の上に、強固な人脈が山並みとして姿を現す事象を指摘しています。

50 年前に分析された日本社会は、前近代的な人間関係を色濃く残しながら、高度経済成長期に突入していきます。やがてバブル経済の崩壊、阪神淡路大震災、東日本大震災などの経験を経て、今日、国際化が叫ばれる時代に至りました。いま 50 年の歳月を振り返ってみますと、かつて近代化の不徹底、民主主義の不徹底が問題となった戦後の日本社会に対し、今日では合理主義がもたらす窮屈さや経済合理主義がもたらす精神的な貧困さが課題となっていることに気がつきます。

では逆に、不合理なものの中に豊かさを探せばよいのでしょうか。話はそう簡単ではありません。というよりも、我々学術文化に携わるものにとっては、話を簡単に割り切らないことが大切です。価値観が多様化し、将来像が見えにくい今日、危険なことは性急な結論に飛びつきたいという誘惑なのです。とくに勝手な解釈、根拠なき本音に基づく大衆受けする過激な発言には十分注意が必要です。いま日本社会を席卷している反知性主義という立場について、佐藤優は、「実証性や客観性を軽んじ、自分が理解したいように世界を理解する態度」と定義しています。われわれは、学識と賢さ、インテリジェントとインテレクチュアルの違いに留意し、面倒な手続きや世俗的な現実を馬鹿にする短絡主義に陥らないよう自戒すべきであると考えます。

さて、最近発表された日経新聞の調査では、本学の学生・卒業生の評価が極めて高いことが示されました。上場企業の人事担当者の評価では、全大学 800 校中、総合 14 位、独創性では 9 位の評価を得ています。朝日新聞の調査では、本学の学生の勉強時間の長さがベスト 10 に入っており、よく勉強していることが示されています。こうした皆さんの努力が社会から認められているという事実は大変うれしいことであり、皆さんも自信と誇りを持って卒業していただきたいと思います。そして近い将来、再びともに研究できる日が来ることを願っています。

平成 27 年 9 月 24 日
京都工芸繊維大学長
古山 正雄